

佐賀市 49 歴史探訪

かせまちおぎの ろくじぞう 嘉瀬町荻野の六地藏

地蔵菩薩じぞうぼさつは観世音菩薩かんのんぼさつとともに、最も庶民に親しまれ信仰されている仏様ではないでしょうか。

今回はこのような信仰の歴史遺産、六地藏を紹介します。

地蔵菩薩は天上・人間・修羅・餓鬼・畜生・地獄の六道を巡ってすべての生き物を救済してくれる仏といわれており、末法思想まっぼうが広まる平安時代の終わりごろから広く信仰されるようになっていきます。

六地藏はこのような地蔵菩薩信仰から生み出された石造物の中の一つです。室町時代後期を中心とした時期に盛んに造られていて、柱状の竿石の上に中台をのせ、それに6体の地蔵菩薩像を半肉彫りしたがん龕部（仏像が掘り込まれた部分）を安置し、さらにその上に宝珠ほうじゆのついた笠石をのせるという形式のものが最も一般的な形のようにです。

佐賀市内には数多くの六地藏が残されていますが、嘉瀬町荻野にある六地藏は笠石に「文明16年(1484年)」という造立銘があり、現在県内で確認されているものの中では最も古い造立銘をもつものです。

500年以上にわたって人々の思いとともに大切に守られてきた六地藏、一度訪ねてみてはいかがでしょうか。



▲六地藏



▲六地藏龕部

一口メモ

この六地藏は、昭和49年2月11日に佐賀市重要文化財に指定されています。

《末法思想》しやうぼう 釈迦しやかの死後1000年間を「正法」、その後の1000年を「像法」、像法の後の10000年間を「末法」という3時期に区分し、末法の時期に入ると仏教が衰え世の中が乱れるという思想です。

日本では永承7年(1052年)に末法の時期に入るとされ、当時の天災、戦乱、飢饉などによる乱れた社会状況が、人々にこのことが現実になったのではないかと強く思わせることとなり、急速に末法思想が広まることとなりました。

